

中古歌合日記の品詞比率

富士池 優美 (中央大学) †

Part of Speech Ratio of “*Utaawase Nikki*” in the Heian Period

Yumi Fujiike (Chuo University)

要旨

中古から中世にかけての歌合は、和漢混淆文が一般化する過程において、和歌の実作に基づき、和歌のあり方や歌ことばの用法について評論が加えられた資料と言える。その中でも歌合の記録である日記については、その資料性が明らかにされていない。本発表では、「天喜四年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合」の漢文日記と仮名日記という異なる文体で書かれる2種類の日記を調査対象とした。調査の結果、長単位データに基づく名詞率とMVRを用い、品詞比率から見られる歌合日記のテキストの特徴は「要約的な文章」として位置づけられ、名詞率の高さが特徴的であることが明らかになった。また、名詞率と文の長さの関係について検討した結果、これまでの指摘とは異なり、文が短いほど名詞の比率が高かった。ここから、語数(音数)の制約や文の長さ以外に、名詞率の増加の要因が存在することが示唆された。

1. はじめに

歌合、中でも中古から中世にかけての歌合は、和漢混淆文が一般化する過程において、和歌の実作に基づき、和歌のあり方や歌ことばの用法について評論が加えられた資料と言える。歌合は序文・歌・判詞・日記といった多様な要素を持つが、日記については特に、これまで日本語史の資料として扱われていなかった面があり、その資料性は明らかにされていない。

本発表では、中古歌合のうち「天喜四年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合」の日記を対象とする。「長単位」に基づく名詞率とMVR(100×相の類の比率/用の類の比率)を用い、中古歌合日記の文体的特徴を見出すことを主目的とする。特徴を明らかにするにあたり、『日本語歴史コーパス 平安時代編』の各作品との比較を行う。調査にあたっては「中古中世歌合コーパスに基づく和歌評論の語彙論的研究」(研究課題番号: 25770179)で構築中の『歌合コーパス』と『日本語歴史コーパス 平安時代編』とを用いた。

† fujiike@tamacc.chuo-u.ac.jp

2. 調査対象

2. 1 資料

(1) 歌合コーパス

発表者は現在、中古から中世初期にかけて開催された歌合を対象としたコーパス『歌合コーパス』を構築中である。この『歌合コーパス』には、歌合の中でもまとまった散文箇所と言える歌合日記を収録し、形態論情報を付している¹。

ここで歌合日記について、説明したい。歌合日記は歌合の記録である。歌合には行事的諸要素がある。例えば、和歌の題や左右の頭、文台、員差²の州浜等の調度、衣装、楽舞の曲目等といった事前に定めおく事柄があり、当日の左右方人の集合から始まり、講師・読師・判者が召され、歌の披講があり、評定があり、楽舞の後、禄を賜り、終わる。歌合日記はこれら行事的の進行に概ね沿った形で書かれ、起こった事柄³も併せて記録される。

本発表では、この『歌合コーパス』のうち、「天喜四年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合」（通称「四条宮春秋歌合」、以下「春秋歌合」とする）を調査対象とする。本文は、日本古典文学大系 74『歌合集』（岩波書店）を使用した。

「春秋歌合」は天喜四（1056）年に催された歌合で、後冷泉皇后寛子が主催者であった。寛子は関白頼通の女である。天皇も密かに臨御され、頼通が後見し、盛大な歌合となった。左を春、右を秋とし、和歌のみならず、書芸・絵画・音楽・工芸・服飾を通じて春秋を競う歌合であった。この「春秋歌合」を対象としたのは、2種類の日記が付されていることによる。2種類とは、漢文日記⁴と仮名日記⁵である。漢文日記は記録体、仮名日記は和文体で書かれており、ほぼ同じ内容を2種類の文体で読み比べることができる貴重な資料と言える。ただし、「春秋歌合」の仮名日記は行事的の進行上、漢文日記の半分弱のところから先が散逸している。また、歌合の行事的要素のうち、どの部分をどの程度記述するかについては差が見られ、単純な文体違いの一对の文章ではない。

漢文日記については読み下したテキストを対象に形態論情報を付与した。歌合日記には割書箇所が多い。割書は「題目〈左春／右秋〉」（〈〉が割書箇所）のような語に対する注記もあるが、詳細を文で記すものも多いため、これも形態論情報付与の対象とした。また、仮名日記については、大系のテキストに従い補読した箇所がある。例えば、「春^{はるの}山べ」とあるところは「春の山べ」とした。

¹ 『歌合コーパス』に付した情報については、富士池（2014a）（2014c）を参照方。

² 文台は歌を載せる台、員差は勝点計算の道具。

³ 今回調査となった漢文日記には、「祝歌の左方に御製があり、是非を述べずに左の勝とした」「右方が負けたのに燈台を設けるのを忘れたので罰酒あるべしと、判者である内大臣がふざけて言った」などのエピソードが含まれている。

⁴ 殿上日記とも言う。「春秋歌合」の漢文日記は蔵人によるもの。

⁵ 仮名日記は甲乙の2種類があったとされるが、現存するのは甲の一部であり、伊勢大輔の手によるものとも言われている。

(2) 日本語歴史コーパス 平安時代編

2014年3月、公開された『日本語歴史コーパス 平安時代編』には、中古和文14作品(竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土佐日記、大和物語、平中物語、落窪物語、枕草子、源氏物語、紫式部日記、和泉式部日記、更級日記、堤中納言物語、讃岐典侍日記)が収録されている。このコーパスには「本文種別」として「会話」「手紙」「歌」「詞書」といった情報が付与されている。これを、歌合日記との比較対象資料として用いた。

2.2 言語単位

『日本語歴史コーパス 平安時代編』の言語単位は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で採用した単位を中古和文用に修正・拡張したものであり、『歌合コーパス』の言語単位も共通の仕様とした⁶。採用した言語単位は、「短単位」、「長単位」の2種類であるが、このうち、構文的側面に着目して規定された「長単位」を用いた。長単位は文節を自立語と付属語に分割した言語単位である。合成語を認めており、結合回数の制限はないため、「二重織物」「思ひやる」「渡らせ給ふ」「藤少納言伊房」といった語や、接辞を含めた形式が1長単位となる。文脈に即して品詞を付与する方針をとっており、同じ語に対して異なる品詞を与えることがある。例えば「哀れ」の場合、「ものあはれ知りすぐし」は名詞を、「いとあはれなる句」は形状詞を付与するといった判別を行う。図1に長単位例を示す。

キー	語彙素	語彙素読み	品詞	活用型	活用形
去る	往ぬ	イヌ	動詞-一般	文語ナ行変格	連体形-一般
閏三月	閏三月	ウルウサンガツ	名詞-数詞		
の	の	ノ	助詞-格助詞		
比	頃	コロ	名詞-普通名詞-一般		
、	、		補助記号-読点		
恪勤	恪勤	カクゴン	名詞-普通名詞-一般		
の	の	ノ	助詞-格助詞		
女房等	女房等	ニョウボウラ	名詞-普通名詞-一般		
相議つ	相諮る	アイハカル	動詞-一般	文語四段-ラ行	連用形-促音便
て	て	テ	助詞-接続助詞		
各々	各々	オノオノ	副詞		
方人	方人	カタヒト	名詞-普通名詞-一般		
を	を	ヲ	助詞-格助詞		
取り分く	取り分く	トリワク	動詞-一般	文語四段-カ行	終止形-一般
。	。		補助記号-句点		

図1 長単位例

⁶ 単位の概要については、コーパス検索アプリケーション「中納言」オンラインマニュアルのCHJ>形態論情報の概要を参照。

3. 調査結果

3. 1 品詞比率

樺島・寿岳 (1965) は、自立語について品詞をその機能によって体 (名詞)・用 (動詞)・相 (形容詞・形容動詞・副詞・連体詞)・他 (接続詞・感動詞) の四つに分類した。この 4 分類に基づき、「春秋歌合」日記の品詞比率を図 2 に示す。『日本語歴史コーパス 平安時代編』の品詞体系では、体の類に「名詞-普通名詞-一般」「名詞-固有名詞- {一般・人名・地名}」「名詞-数詞」「代名詞」が、用の類に「動詞-一般」が、相の類に「形容詞-一般」「形状詞- {一般・タリ}」「副詞」「連体詞」が、他の類に「接続詞」「感動詞-一般」が分類される。

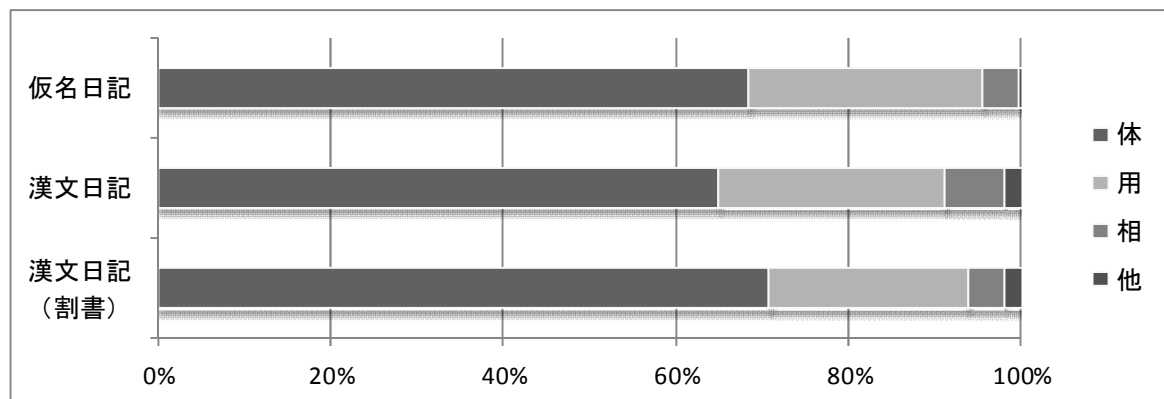


図 2 「春秋歌合」日記の品詞比率 (延べ語数)

体の類の割合は漢文日記 (割書)、仮名日記、漢文日記の順で高くなっている。用の類の割合は漢文日記 (割書) がやや低く、相の類の割合は漢文日記がやや高い。漢文日記、漢文日記 (割書) に見られる他の類は、漢文訓読によく見られる「或いは」「但し」といった接続詞である。また、表 1 に示したように、相の類の内訳が大きく異なり、仮名日記では形容詞主体、漢文日記では地の文、割書ともに副詞主体となっており、文体差が見られる。

表 1 「春秋歌合」日記における相の類の内訳 (粗頻度)

品詞	仮名日記	漢文日記	漢文日記 (割書)
形容詞	14	4	7
形状詞	2	2	2
副詞	5	16	12

3. 2 名詞率と MVR

本発表では、品詞比率に基づきテキストの特徴を示す指標として、名詞率と MVR を用いる。名詞の比率は文章の特質を表し、名詞の比率に応じて他の品詞もある傾向を持って変化する、つまり文章のジャンルによって品詞の割合が決定されると考えられる。ここでは

延べ語数を用いて、品詞比率を求める。樺島・寿岳（1965）は、自立語について品詞をその機能によって体（名詞）・用（動詞）・相（形容詞・形容動詞・副詞・連体詞）・他（接続詞・感動詞）の四つに分類したとき、体の類と、用・相それぞれの類の関係を見るにあたり、MVR という「 $100 \times \text{相の類の比率} / \text{用の類の比率}$ 」の式で表される指標を提案し、名詞率と MVR の組み合わせから見出せる文体的特徴として、名詞率が高く MVR が小さいものを「要約的な文章」、名詞率が低く MVR が大きいものを「ありさま描写的な文章」、名詞率が低く MVR も小さいものを「動き描写的な文章」と位置づけた。

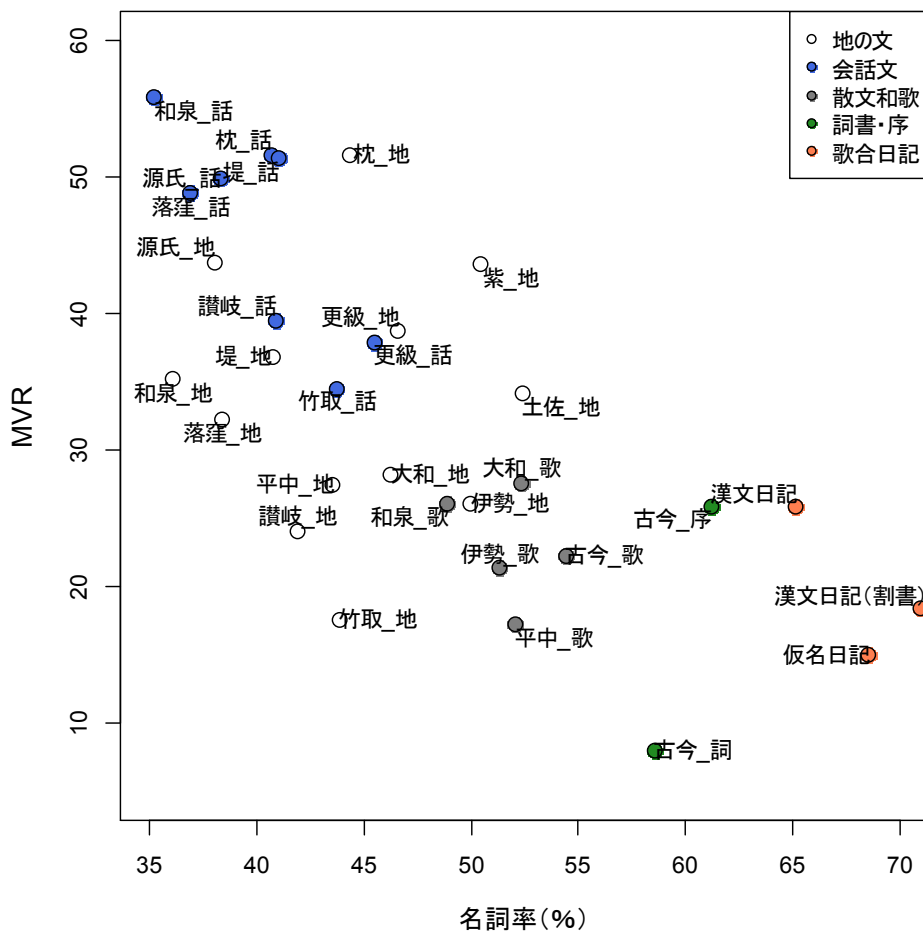


図3 「春秋歌合」日記と中古和文14作品の名詞率・MVR

「春秋歌合」日記の品詞比率を中古和文の品詞比率と比較するとどのような位置付けになるのだろうか。富士池（2014b）では『日本語歴史コーパス 平安時代編』に基づく中古和文14作品の名詞率とMVR⁷を示した。今回の調査結果⁸に、中古和文14作品の名詞率・

⁷ 『古今和歌集』は歌・詞書・仮名序に、他の13作品は地の文・会話文・歌に分けて集計し、各作品の延べ語数の20%以上を占める場合のみを示したもの。

⁸ 図3では歌合日記を地の文としているが、漢文日記には8長単位、仮名日記には7長単位の会話を含む（自立語の長単位数）。会話文が1カ所ずつのみであったため、今回は地の文から除外しなかった。

MVR を重ね合わせた散布図を図3に示す。

富士池 (2014b) では「要約的な文章」として、物語・日記所収の和歌と『古今和歌集』詞書・仮名序を挙げた。しかし、図3から、「春秋歌合」日記の方がより名詞率が高く MVR が小さい「要約的な文章」としての特徴が強いことが明らかになった。ここから、歌合日記が物語・日記・随筆の地の文とは異なるジャンルの文章であることが見てとれる。中でも、名詞率の高さが特徴的である。漢文日記と仮名日記という文体の違いについては、名詞率より MVR、つまり相の類（形容詞・形状詞・副詞）と用の類（動詞）のバランスに現れている。

3. 3 名詞率と文の長さ

「春秋歌合」の日記について、名詞率と MVR を見た結果、MVR は中古の和歌や、地の文の中で MVR が低めの資料と同程度であったが、名詞率の高さが特徴的であることが明らかになった。

文章における名詞の比率が増加する要因として、樺島 (1979) では「ある内容を、限られた言葉数で述べようとするときには、凝縮化 要約化の二つが働く」とする。凝縮とは、意味的に重複する部分をくりこんで言葉数を減らすというもので、結果として「文の構造が複雑で」「文の長さが長い」という性格を持つとする。それに対し、要約は限られた言葉数の中で意味内容を表すもので、要約化が働いた文章の例として、新聞の見出し、辞典、短歌・俳句、出版目録解説、映画解説パンフレット、新聞のラジオ・テレビ案内を挙げる。

「春秋歌合」日記の名詞率の高さは、樺島 (1979) に示された二つの要因で説明できるのだろうか。中古散文作品中の和歌は、現代の短歌・俳句同様に音数の制約があるために「要約」によって名詞の比率が増加していると考えられる。それに対し、『古今和歌集』仮名序・詞書や、今回の調査対象である歌合日記は語数（音数）の制限はない。「春秋歌合」日記の名詞率の高さが要約によるものでないのならば、凝縮によるものなのだろうか。凝縮に関しては、限られた言葉数という制約がなくても文章の一つのスタイルとして起こり得る現象と考える。そこで、コーパスに付与した情報のうち文境界情報⁹を利用して、「春秋歌合」日記の文の長さと言詞率との関係について、検討する。

表2に、「春秋歌合」日記における1文あたりの自立語数と言詞率を示した。1文あたりの自立語数が文の長さを意味する。「春秋歌合」日記の仮名日記、漢文日記、漢文日記（割書）のほか、比較する材料として中古和文のうち名詞率が低いものから『源氏物語』桐壺巻の地の文を、名詞率が中程度のものから枕草子（冒頭3章段¹⁰）の地の文を、名詞率が高いものから『古今和歌集』仮名序の地の文¹¹を示した。

9 「日本語歴史コーパス」「歌合コーパス」とも、単位ごとに文頭かそうではないかという文境界情報が付与されている。ただし、コーパス検索アプリケーション「中納言」ではこの情報は公開されていない。

10 「春はあけぼの」「ころは」「正月一日は」

11 歌、古注、古注（歌）、古注（詞書）を除いたものを地の文とした。

表2 「春秋歌合」日記における1文あたりの自立語数(長単位)と名詞率

	自立語数	文の数	1文あたりの 自立語数	名詞率(%)
仮名日記	514	53	9.698	68.5
漢文日記	324	51	6.353	65.1
漢文日記(割書)	496	82	6.049	71.0
源氏物語(地の文)	2009	169	11.888	38.0
枕草子(地の文)	552	49	11.265	44.4
古今和歌集(仮名序)	805	69	11.667	61.2

表2から、1文あたりの自立語数が少ない、つまり文が短いほど名詞率が高くなる様子が見てとれる。漢文日記(割書)が最も文が短いという結果になったが、1長単位から成る文は3、2長単位から成る文が1あるほかは、極端に短い文はなかった。

1文あたりの自立語数と名詞率の相関係数は-0.718と負の相関が見られた。これは、樺島(1979)で指摘された、凝縮化された文章は文が長く名詞の比率が高いということと相反する結果となった。樺島(1979)では現代書き言葉を対象としているのに対し、今回の調査は平安時代の書き言葉を対象としている。今回の調査結果から、少なくとも平安時代の文章については、名詞率が増加する要因として、要約と凝縮、つまり語数(音数)の制約や文の長さ以外の第3の要因が存在することが示唆された。

「春秋歌合」日記の中で文体の違いについて見ると、漢文日記と仮名日記の差が大きく、漢文日記は文が短いことがわかる。また、物語・随筆の地の文や和歌集序文と「春秋歌合」仮名日記は同じ和文体であっても差があり、仮名日記の方が文が短い様子が見てとれる。これは「春秋歌合」仮名日記の特徴なのか、歌合の仮名日記に通じる文体的特徴なのか、調査対象を広げて確認する必要がある。

4. おわりに

本発表では『日本語歴史コーパス 平安時代編』『歌合コーパス』の「長単位」データを用い、品詞比率に基づきテキストの特徴を示す指標として名詞率とMVRを算出した。その結果、中古歌合日記の1資料である「春秋歌合」日記は、他の中古和文資料と比較して、名詞率が高くMVRが低い「要約的な文章」であることが明らかになった。また、特に名詞率の高さが特徴的であったことから、名詞率と文の長さの関係について検討したところ、文が短いほど名詞の比率が高いという、これまでの指摘とは異なる結果となった。ここから平安時代の文章については、名詞率が増加する要因として、語数(音数)の制約や文の長さ以外の第3の要因が存在することが示唆された。この要因の究明は今後の課題となる。「春秋歌合」日記という、漢文日記と仮名日記が揃った資料を対象としたにも関わらず、具体的な描写の違いといったところまでは考察が及ばなかった。具体的な描写の違いを検討し

ていく中で、第3の要因についても考えていきたい。

今回の調査対象は「春秋歌合」日記のみであることから、歌合日記の特徴と言い切れな
いところがあり、これも今後の課題となる。歌合日記は全ての歌合にあるものではなく、「春
秋歌合」のように漢文日記と仮名日記が揃っているものは数少ないといった資料の制約は
ある。一方で、歌合日記のような行事の記録は説明的な文章であり、物語・日記といった
創作とは異なる文章のジャンルである。説明的な文章の資料性についてはまだ検討が不十
分な点が多く、引き続き検討していきたい。

付 記

本発表は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」、JSPS 科研費「中
古中世歌合コーパスに基づく和歌評論の語彙論的研究」（研究課題番号：25770179）の成果
の一部である。

文 献

- 樺島忠夫・寿岳章子（1965）『文体の科学』（綜芸舎）
樺島忠夫（1979）『日本語のスタイルブック』（大修館書店）
萩谷朴・谷山茂 校注・訳（1965）日本古典文学大系 74『歌合集』（岩波書店）
富士池優美（2014a）「中古中世歌合の構造化」『言語処理学会第20回年次大会発表論文集』、
pp.205-208
富士池優美（2014b）「品詞比率からみる中古和文テキストの特徴」『日本語学会2014年度
春季大会予稿集』、pp.185-190
富士池優美（2014c）「平安初期歌合の品詞比率」『第6回コーパス日本語学ワークショップ
予稿集』、pp.21-30

関連 URL

- 日本語歴史コーパス http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/
コーパス検索アプリケーション「中納言」オンラインマニュアル <https://maro.ninjal.ac.jp/wiki/>